

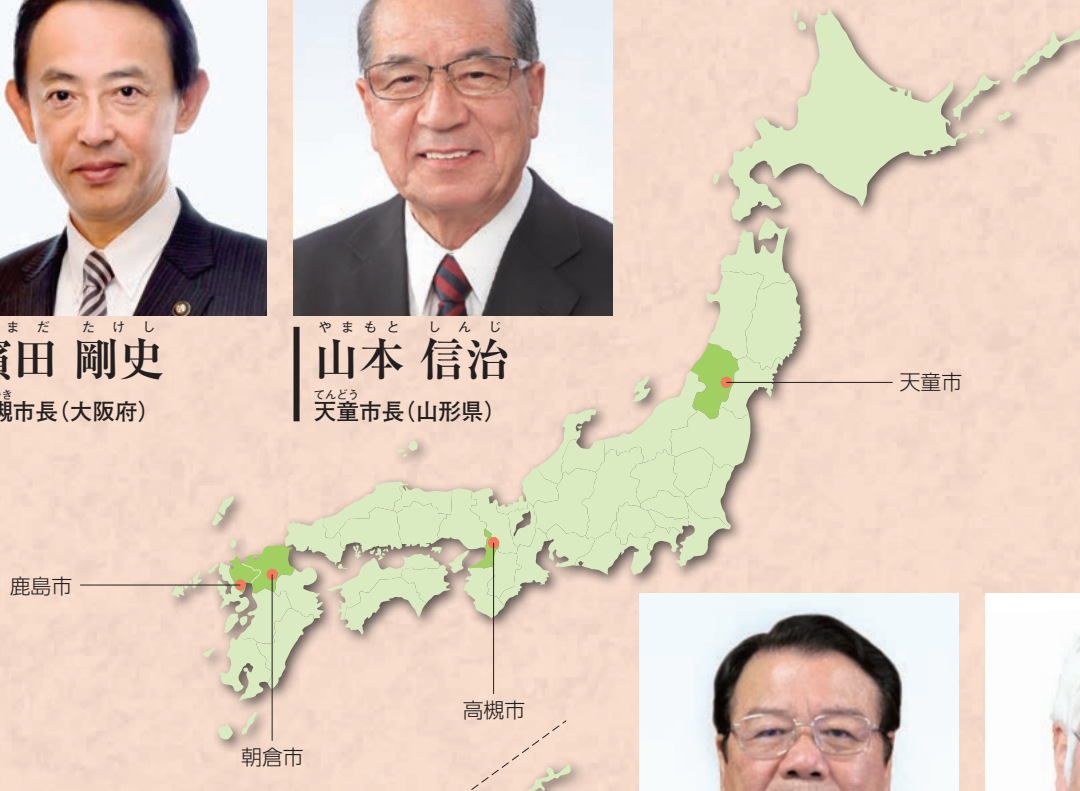
地域の文化的ソフト資源を生かしたまちづくり ～囲碁・将棋・かるた～



はまた たけし
濱田 剛史
たかつき
高槻市長(大阪府)



やまもと しんじ
山本 信治
てんどう
天童市長(山形県)



司会・コーディネーター

ほそかわ たまお
細川 珠生

政治ジャーナリスト



ひぐち ひさとし
樋口 久俊
かしま
鹿島市長(佐賀県)



はやし ゆうじ
林 裕二
あさくら
朝倉市長(福岡県)

プロからアマチュアまで幅広く親しまれている囲碁・将棋・かるたは、地域の歴史文化や産業に深く根ざしており、愛着や誇りにつながっています。また、長い歴史の中で競技として発展を遂げており、各地でプロのタイトル戦が行われています。現在、これら地域の文化的ソフト資源を、子どもたちの教育や伝統文化の普及・継承にとどまらず、市のプロモーションやまちのイメージづくり、多世代交流、住民の健康福祉への活用など、幅広くまちづくりに生かそうとする自治体が増えています。

座談会では囲碁・将棋・かるたを生かしたまちづくりを進める、山本・天童市長、濱田・高槻市長、林・朝倉市長、樋口・鹿島市長にお集まりいただき、それぞれの文化的ソフト資源の特徴や市民に広く普及させるための取り組み、次世代への継承に向けた施策、今後の展望などについて幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)



天童市は日本一の将棋駒の生産地。将棋駒産業の伝統を絶やさぬよう若い世代の職人育成施策を進めています。

山本 信治
天童市長(山形県)

ゆかりの地が進める普及・振興の取り組み

細川 古くから人々に親しまれ、長年にわたり地域で育まれてきた囲碁・将棋・かるたは、現在の私たちの生活にも密接した文化的ソフト資源です。それでは、各都市における囲碁将棋・かるたの歴史や位置付け、現在、進められてい

る取り組みについて、お聞かせいただきたいと思えます。

山本 天童市は全国の生産量の9割以上を占める、日本一の将棋駒の生産地です。入門用の普及品から、プロのタイトル戦で使用される高級品まで、さまざまな種類の将棋駒を生産しています。天童市が将棋駒を生産するようになったのは、江戸後期からです。財政難に苦しんでいた天童藩が、生活の困窮にあえぐ下級藩士に将棋駒作りを内職として奨励したことに端を発します。そうした長い歴史を持つ将棋のまちですから、天童市では毎年のように名人戦などのタイトル戦が行われています。

また、市の施策としても、以前から「将棋にこだわったまちづくり」を進めています。毎年4月には市内の舞鶴山頂広場を舞台に、甲冑を身にまとった高校生などが駒役となり、プロ棋士が対局する恒例の「人間将棋」が行われ、県内外から11万人もの観光客が訪れます。

さらに、全国で唯一の将棋専門の資料館「天童市将棋資料館」を開設しているほか、誰でも気軽に将棋が楽しめるよう、対局スペースを設けた「天童将棋交流室」も設置しています。加えて、まちの至るところに将棋をモチーフにしたオブジェを設置するなど、市のシンボルとして将棋を積極的に活用しています。

濱田 17世紀半ばから高槻藩主として高槻を治めた永井家は文化に造詣が深く、藩士たちも日ごろから将棋をたしなんでいたようで、高槻城跡から江戸期の将棋駒が多数出土しています。現在でも、高槻市は将棋が盛んなまちで、市ゆかり(出身、在住など)のプロ棋士が多数活躍しています。そうした状況を背景に、高槻市では

まちを挙げて、将棋振興に取り組んでいます。

平成30年には、文化振興や青少年の健全育成などを目的に、自治体としては初めて、日本将棋連盟と包括連携協定を締結するとともに、これを記念して、市在住の桐山清澄九段の名を冠したアマチュア将棋大会「桐山清澄杯将棋大会」を創設しました。さらに、平成31年には、同連盟が主催する「子ども将棋高槻サテライト教室」を市内に開校し、毎週多くの子どもたちが学んでいます。将棋のタイトル戦の誘致にも取り組んでおり、平成31年から3年連続で市内の温泉旅館で王将戦が開催されています。

また、現在の関西将棋会館は建て替え時期を



平成30年10月14日、将棋の同時対局数世界記録2362局を達成(天童市)

自治体として初めて 日本将棋連盟と包括連携協定を締結し 共に将棋文化の振興と 青少年の健全育成などに 取り組んでいます。



濱田 剛史
高槻市長(大阪府)

迎えていることをお聞きし、日本将棋連盟に高槻市への移転を提案したところ、この申し出が受け入れられ、令和5年度内をめどに新たな会館が市内に建設されることが決まりました。高槻市としても大変光栄なことであり、心から

歓迎しています。

林「秋の田の かりほの庵(いほ)の苦(とま)をあらみ わが衣手は 露に濡れつつ」。ご存じ、天智天皇が詠まれた小倉百人一首の筆頭歌ですが、この歌は母の斉明天皇が朝倉で崩御された際に、天智天皇がこの地で詠まれたと伝えられています。このような歴史を持つ朝倉市は、百人一首ゆかりの地として、市民と協働して、「百人一首活用事業」に取り組んできました。

平成23年度には、子どものうちから郷土への愛着や誇りを深めてもらうことを目的に、入門用教材として、5色に色分けされた「五色百人一首」の札を市内全小中学校に配布しており、授業などで広く活用されています。

さらに、平成24年度からは、地元有志や団体などで構成される実行委員会と連携して、「百人一首朝倉大会」を開催しています。第1回の参加者は150人前後と、当初は小規模な大会でしたが、年々参加者が増え、令和元年度の第8回大会は600人近くが参加するまでになりました。

また、同大会に関連して、百人一首や天智天皇をテーマにしたシンポジウムや講演会なども行っています。こうした取り組みを通じて、「百人一首ゆかりの地」として、市の魅力を広く発信しているところです。

樋口 囲碁の世界では、傑出した名人に対し「碁聖」という尊称が使われます。鹿島市は日本で初めて碁聖と称され、平成28年に囲碁の殿堂入りを果たした寛蓮上人(橘良利)の誕生の地です。この寛蓮は、平安時代に京都で活躍した文人ですが、天皇の勅命で「碁式」という囲碁の



プロの棋士が直接指導する「子ども将棋高槻サテライト教室」(高槻市)

ルールや心構えなどを記した書物を作り、延喜13(913)年に醍醐天皇に献上した人物としても知られます。

このような史実にちなみ、鹿島市では戦後間もなくの昭和27年から祐徳稲荷神社を会場に、「祐徳本因坊戦」を開催してきました。九州・沖縄・山口各県の代表アマチュア棋士たちによる、西日本一の囲碁大会です。また、平成30年には、囲碁文化を通じたまちづくりや人づくりに取り組む自治体の代表者をお招きして、市内で「囲碁サミット」を開催しました。

さらに、次世代への囲碁文化への継承を目指し、日本棋院鹿島支部の協力を得ながら、市内



百人一首文化の振興は
もちろんのこと、いろいろな分野で
若い世代の力を生かした
取り組みを推進していきます。

林 裕二
朝倉市長(福岡県)

の小学校3年生を対象に、「ふれあい囲碁」事業を推進しています。併せて、市内で活動する「碁聖寛蓮顕彰会」の皆さんの尽力により、小中学生を対象にした囲碁教室「ヒカルの碁鹿島スクール」も展開されています。

愛好者を増やして、裾野を広げる

細川 私は恥ずかしながら、囲碁・将棋に関しては子どものころに父親に少々教わった程度ですが、地域の中で裾野を広げるためには、私のような初心者を含め、多くの市民に対し、体験・習得の機会を設けることも重要だと思います。この点については、いかがでしょうか。

山本 それは大事な視点ですね。将棋を指す人が少なくなれば、将棋駒産業も成り立ちませんから、天童市でも地域の中で愛好者を増やそうと、市制施行60周年の節目となる平成30年に「一会場で同時に行った将棋の最多対局数」のギネス世界記録に挑戦しました。

それまでの世界記録は1574局(3148人)。これを超えるために、将棋連盟の協力の下、子ども向け、初心者向けの将棋教室を開催したり、婦人会の皆さんに将棋の指し方を教えたりするなど、参加者を増やす努力を重ね、新記録の2362局(4724人)を達成できました。

濱田 将棋にせよ、他の伝統文化にせよ、子どもの時に体験させるのが最も効果的だと思います。もちろん、興味を覚える子どももいれば、そうでない子どももいます。他のゲームにのめり込む子どももいるでしょう。大事なことは、いろいろな文化や娯楽に触れる機会を提供することだと思います。

高槻市では、将棋の体験機会を数多く設けています。先ほどご紹介した「子ども将棋高槻サテライト教室」以外にも、日本将棋連盟の「学校教育支援事業」を活用して、市内の小中学校で棋士による直接指導も実施しています。また、



平成24年度から実行委員会と朝倉市が連携して開催している「百人一首朝倉大会」(朝倉市)

令和2年には、全国の小学生を対象に「高槻こども王将戦」を創設しました。

林 五色百人一首を市内の小中学校に配布したことで、百人一首が子どもたちに着実に浸透してきました。中にはクラブ活動として百人一首に取り組む学校も出てきています。また、子どもを対象とした「五色百人一首大会」も毎年開催しています。

さらに、若い世代が市の歴史や文化に触れる機会にしたいと、「百人一首朝倉大会」には市内の中学生・高校生にも運営ボランティアとして参加するよう、広く呼び掛けています。

樋口 「ふれあい囲碁教室」や「ヒカルの碁鹿島

囲碁が持つ多様な教育効果を 地域の中で広くアピールして 囲碁ファンの裾野を 広げていきたいですね。



樋口 久俊
鹿島市長(佐賀県)

スクール」をはじめとした、囲碁の普及活動の成果として、最近、地元の高等学校に囲碁クラブができるなど、明るい兆しも見えてきました。とはいえ、まだ、囲碁の魅力を若い世代に十分に伝えきれないのも事実です。「囲碁は高齢の人が楽しむもの」というイメージが強いのも一因でしょう。しかし、実際、囲碁はゲーム感覚に富んだ競技で、そのゲーム感覚は子ども

たちこそ優れています。しかも、囲碁は高い教育効果があるともいわれています。礼儀作法を学べるし、じっくり考えることで思考力も鍛えられます。さらに、囲碁は相手を思いやり、尊重する気持ちがないと成り立ちませんから、いじめ防止にも効果があるといわれています。こうした点を親御さんも含め、広くアピールしたいと考えています。

地域としてプロ棋士などを育成する意義

細川 囲碁・将棋・かるたは古くから大衆の娯楽として発展してきた一方で、それぞれ競技としても確立されています。プロの棋士をはじめ、地域ゆかりの人たちが活躍すれば、市の知名度も上がるでしょう。プロの棋士などを育成するお考えはありますか。

山本 残念ながら、天童市からはまだプロの棋士が出ておらず、長年の課題でもありました。そこで、従来から行ってきた「天童少年少女将棋教室」に加えて、平成31年からは新たに「天童プロ棋士育成教室」を始めました。まずは、日本将棋連盟の奨励会への入会を目指して、選ばれた子どもたちに英才教育を行っているところです。環境面は大きく異なりますが、ゆかりの棋士を多く輩出する高槻市さんの取り組みをぜひ参考にさせていただきたいですね。

濱田 幸い高槻市には市ゆかりの棋士が多数いますが、プロ棋界はごくごく限られた実力者だけが活躍できる、ハードルが高い世界です。プロ棋士を育成するのは容易なことではないでしょうが、ぜひ、情報交換したいですね。本市としても、天童市さんの将棋を生かしたまち



平成13年から小中学生を対象とした囲碁教室を開催している「ヒカルの碁鹿島スクール」(鹿島市)

づくりについて学ばせていただきたいと思います。

樋口 鹿島市も寛蓮を生んだ地とはいえ、まだプロの囲碁棋士が出ていません。子どもはヒーロー好きですから、地元出身のプロ棋士が誕生し、注目が集まれば、子どもたちの囲碁熱も湧き上がるでしょう。わが市からも囲碁のプロ棋士を輩出したいですね。

林 競技かるたの世界でも、「名人」「クイーン」のタイトルがあります。朝倉市でも「百人一首朝倉大会」にクイーンをお招きし、地元の小学生と対戦いただくなど、第一人者と触れ合う機会をつくっています。

伝統文化を守り、後世に継承する

細川 それでは最後に、今後の展望をお聞かせください。

濱田 関西将棋会館の高槻市への移転を追い風に、「将棋のまち」として、さらにまちを盛り上げていきたいとの考えもありますが、それ以上に私どもとしては、日本の将棋文化の振興に貢献したいとの思いを強く持っています。

その観点から、新会館の建設支援を目的に、日本将棋連盟と連携して「ふるさと納税型クラウドファンディング」に取り組んでいます。寄付をされる方にとっては、ふるさと納税制度の税額控除を受けられるメリットは大きいでしょうし、自治体が関与することで安心感も強いでしょう。将棋文化の保護・振興はわれわれの責務と受け止め、これからも最大限の支援をしていきたいと考えています。

山本 天童市では将棋駒の職人の高齢化や後継者不足が深刻化しており、若い世代の職人の育成が大きな課題となっています。この課題解決に向け、天童市では平成9年度から山形県将棋駒協同組合と連携して、駒職人としての基本的



細川 珠生
政治ジャーナリスト

な技術を5年間で学ぶ「後継者育成講座」を実施してきました。ただし、それだけの期間で一人前の職人を育て上げることはできません。そこで、長期的な職人の育成システムの確立を目指し、令和2年には、道の駅「天童温泉」の駅舎として利用していた森林情報館を改修して、将棋駒のPRコーナーを設置。修了生がより経験を積めるよう、製作実演の場を設けています。

樋口 囲碁はインターナショナルな競技で、プロ・アマそれぞれ、世界大会も行われます。囲碁は中国、韓国を中心に、外国人観光客を呼び込む、有力な観光資源にもなると思います。鹿島市には、他にもさまざまな観光資源があります。九州で最初の「重点道の駅」である「道の駅鹿島」や、ラムサール条約に登録されている「肥前鹿島干潟」、さらには世界最大規模のお酒の祭典「IWC(2011)」の日本酒部門で最優秀賞を受賞した酒蔵もあります。また、市内肥前浜宿内の2地区は国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。ただし、これだけ有力な観光資源が市内に点在しているながら、「面」として有効活用できていません。これからは、囲碁も含めて、それぞれの資源をうまく組み合わせながら、観光振興に一層、力を入れていきたいですね。

林 今年の8月、全日本かるた協会主催の「小倉百人一首競技かるた全国中学生選手権大会」が朝倉市で開催される予定でした。全国から中学生をお招きする機会はめったにないこととして、本市としても、訪れた方々へのおもてなしとして、地元の福岡県立朝倉光陽高校、三連水車の里あさくら(農産物直売所)と連携し、地元産食材を使用した「まるごと朝倉 百人一首弁

当を協働で開発しました。結果的に、新型コロナウイルス感染症の影響で、大会は中止となってしまいました。この弁当を市内で定期的に販売したところ、大変好評で、飛ぶように売れています。大会の中止は残念なことでしたが、このような形で高校生の若い力が地域貢献してくれていることに、喜びを感じています。今後も、百人一首文化の振興はもちろんのこと、さまざまな分野で若い世代の力を生かしたまちづくりを推進していきたいと思えます。



細川 お話をお聞きして、囲碁・将棋・かるたは、各地域が誇る、貴重な伝統文化そのものであると実感しました。また、各都市では一部の愛好者だけでなく、地域全体に裾野を広げるために、懸命に努力されていることも分かりました。今後も市民や地域団体とも連携し、まちづくりなどにも広く活用しながら、次世代への確実な継承に努めていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

(令和3年9月30日、WEB会議形式にて開催)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は1月号に掲載予定です。